

■ 共通の成果指標と達成目標

国際化関連

○ 短期留学プログラム

2022年度までコロナ禍で対面実施を見合わせていたが、2023年度から受入・派遣ともに対面による実施を再開した。

派遣プログラムは、8～9月に開催された米国・ウィリアム・アンド・メアリー大学（The College of William and Mary）夏季講座に24名、英国・ケンブリッジ大学ダウニング・コレッジ夏季講座に60名、2024年2～3月に開催されたパリ政治学院春季講座に25名の本学学生が参加した。

受入プログラムとしては、4学期（クォーター）制を活用したKeio Summer Programに32名の留学生が参加した。国際センター講座の春学期後半科目を履修し、週末には、国際センター塾生機構の学生とともに、写経体験ツアー、東京日帰りツアーに参加し日本人学生との交流を深めた。

慶應義塾大学短期日本学講座（KJSP: Keio Short-Term Japanese Studies Program）を2024年2月に12日間にわたり開催した。本学と協定大学の学生計35名が参加し、英語で日本文化について学び、交流を深めた。

APRU: Association of Pacific Rim Universities（環太平洋大学協会）のオンライン学生交換プログラム、APRU Virtual Student Exchange (VSE) Programに参加した。APRU加盟の海外の大学から12名の留学生を受け入れ、本学からは7名の学生を派遣した。 <https://vse.apru.org/>



ガバナンス改革関連

○ ダイバーシティ・エクイティ&インクルージョンの推進に向けた取組み

APRUのAsia-Pacific Women in Leadership (APWiL) のメンタリング・プログラムでの経験をもとに、2023年度から本学独自の慶應義塾メンタリング・プログラムを正式に開始した。1年間を通してリーダーシップやエンパワメント等、それぞれのテーマについて学び、全36名の女性教員が参加した。

2023年6月、シンポジウム「大学におけるDiversity Equity and Inclusion (DEI) の課題—多様な経験から学び、共通の目標を達成するために」を対面およびオンラインのハイブリッド形式で開催した。APRUのAsia-Pacific Women in Leadership (APWiL) のメンタリング・プログラムに取組む各国の大学の研究者と、本学の女性研究者が登壇し、活発な議論が交わされた。



○ 戦略的パートナーシップネットワーク構築プロジェクト：グッドプラクティスの共有

「大学の国際化促進フォーラム」事業の「戦略的パートナーシップ」のネットワーク構築プロジェクト（幹事：東京大学）に引き続き参加し、本学の活動事例について他大学と共有した。

第3回公開シンポジウム「海外大学との国際連携の今後の展望」（2023年12月）では、主にAPRUやU7+アライアンスなどのコンソーシアムにおける活動から、戦略的パートナーシップを見出し、関係強化を図ってきた本学の経験を、本プロジェクト参加大学・非参加大学双方に共有した。 <https://www.u-tokyo.ac.jp/content/400184826.pdf>



○ グローバル・アドバイザー・カウンシル Global Advisory Council (GAC)

GACメンバーである以下の2大学の学長と本学塾長が意見交換を行なった。

2023年9月(ソウル)、10月(東京)	延世大学	Seoung Hwan Suh学長
2024年1月(ダボス)	シンガポール国立大学	Tan Eng Chye学長



教育改革関連

○ FutureLearn オンライン教育プラットフォーム

2023年度は、英語13コースを開講した。2023年からは「Understanding Quantum Computers（量子コンピューター入門）」のコースが南洋理工大學（Nanyang Technological University）の単位互換認定科目に選定され、海外大学での活用も進んだ。



○ GICセンター（Center for Global Interdisciplinary Courses）

GICは、様々な分野の授業科目を英語またはその他の外国語で提供するプログラムで、学生は所属学部によらず履修できる。2023年度は、社会情勢を踏まえた感染症に関する知識を深める自然科学分野の科目「科学と環境Ⅰ（Covid-19: Looking back and looking forward）」および歴史分野の科目「歴史Ⅰ」を新たに開講した。2023年度の履修者総数は1,230名（2022年度1,173名）。卒業時までに科目の取得合計が40単位以上となり修了証が授与された修了認定者は、2023年度までの累計で268名となった。



■ 大学独自の成果指標と達成目標

○ 研究資金規模の拡大と国内トップクラスの実績を誇る大学発ベンチャーの支援体制構築

研究資金規模は、2023年度には総額288億円に達し、事業開始当初より約1.5倍に拡大し、目標値を大幅に超えた。拡大要因のひとつには、2022年度に世界トップレベル研究拠点プログラム（WPI）の拠点に本学の「ヒト生物学－微生物叢－量子計算研究センター（Bio2Q）」が私立大学で初めて採択されたことや、2023年度に地域中核・特色ある研究大学強化促進事業（J-PEAKS）に採択されたことが挙げられる。

また、2015年に本学発のベンチャー企業に対する投資をするベンチャーキャピタル、(株)慶應イノベーションイニシアティブを設立し、大学発ベンチャーを支援する体制を整備したことで、2023年度の本学発スタートアップ資金調達額 510億円（国内1位）、大学発ベンチャー数は291社（国内2位）を達成した。

○ クロス・アポイントメントによる海外副指導教授制度

海外副指導教授は、2023年度の目標値200名を大幅に上回り、2014年度の制度開始以降最多となる286名を任用した。コロナ禍はオンラインによる遠隔指導（遠隔型）が中心であったが、2022年度から来日による直接指導（来日型）を再開し、2023年度は来日型の任用数が遠隔型を上回った。また、制度開始以降最多となる279名の学生が、海外の大学の研究者から指導を受ける機会を得た。

■ 国際的評価の向上につながる取組

○ 研究大学コンソーシアムを活用した戦略的な連携

APRU、U7+アライアンスなど、本学の協定大学も多く含まれる研究大学のコンソーシアムの一連の会議に参加し、課題や企画について話し合った。

2023年6月に香港で開催されたAPRUの学長会議では、塾長がパネルディスカッションに登壇し、SDGs達成に向けた新たな試みや戦略として、「慶應義塾メンタリング・プログラム」や、SDGsを実現するための慶應義塾のビジョン・目標・ターゲットを提言する「塾生会議」の取組みを紹介した。また、2023年6月からは、塾長が日本の加盟大学を代表し、APRU Steering Committeeメンバーに就任している。

2023年度から、日英大学間連携プログラムRENKEI（Japan-UK Research and Education Network for Knowledge Economy Initiatives）に新たに加盟した。2024年度には本学の鶴岡タウンキャンパスにてワークショップを主催する。

○ Experience Japan Exhibition 2023

第13回目となるExperience Japan Exhibition（EJE）を開催した。今回は、SGU事業の集大成として、「日本への留学」から大学のグローバル化を考えるシンポジウムを、2023年9月に対面で開催し、アーカイブ動画をウェブサイトにて公開した。また、過去12回と同様、国内の他大学や機関と協力し、日本の大学で学びたい海外の学生に向けて、留学に関する情報をオンライン上に集約したポータルサイトを2023年8月から公開した。（全国26大学と7機関の協力により2024年7月末まで公開）

○ 慶應義塾大学グローバルリサーチインスティテュート（KGRI）

KGRIでは、「長寿」「安全」「創造」と、これら3つのクラスターを網羅する「横断」の4つのクラスターで計17の研究プロジェクトを遂行した。各クラスターで講演会やワークショップ等を多数開催したほか、国内外で最先端の研究・教育に携わる研究者、著名人を招いてKGRI Lecture SeriesやGreat Thinker Seriesと題する講演会を開催し、各アーカイブ動画をウェブサイトにて一般公開した。

○ 国際広報

海外向けの入試情報や研究情報を、英語による月刊e-ニュースレター(The Penmark)やウェブサイト(Keio Research Highlights)、SNS等を通じて発信した。SNSのフォロワー数は年々順調かつ有機的に増加しており、2024年4月現在でのInstagramフォロワー数は2.3万人、Facebookフォロワー数は2.7万人となった。



■ 自由記述欄

○ THE 世界大学インパクトランキング（THE Impact Rankings 2023）3つのゴールで世界100位以内

国際連合が提唱するSDGsの達成度により社会に対する大学の貢献度（インパクト）を測定することを目的とした本ランキングは、本学の事業構想テーマの核心をなす「サイエンスによる地球社会の持続可能性向上」の進捗をはかる一つの指標となる。世界112の国・地域の1,591機関のうち、本学の総合ランキングは、世界101-200位、「Goal 16 平和と公正をすべての人に」では32位となった。

2023年度は本学の取組みをまとめた「慶應義塾サステナビリティレポート」をウェブサイトで公開するなど、SDGs達成に向けた取組みを国内外に発信した。 <https://www.global-sdgs.keio.ac.jp/en/sdgs/>

